



日本植物病理学会ニュース 第43号

(2008年8月)

【日本植物病理学会会員および関係者の皆様】

皆様のおかげをもちまして本年6月からJGPPがWeb of Scienceに収録されました。

Web of Scienceは、トムソンサイエンティフィック（現在はトムソン・ロイターと社名変更）という一企業が提供するWebベースの学術文献データベースです。Web of Scienceには自然科学、社会科学、人文科学の3つの引用検索データベースと2つの化学データベースが提供されています。この中で植物病理学が含まれる自然科学の引用検索データベースをScience Citation Index Expanded（以下、SCIExpanded）と呼びます。

Impact factorとはこのトムソン・ロイター社が提供するWeb of Scienceの収録対象雑誌に付与される、雑誌の評価指標です。従いまして、JGPPにImpact factorを付与してもらうためには、まずWeb of Science（厳密にはSCIExpanded）に収録してもらうことが必要となります。今回、歴代の植物病理学会長や編集委員長をはじめとする多くの学会員の皆様方の長年にわたるご尽力のお陰をもちましてこの6月にJGPPのWeb of Scienceへの収録が認められました（年間約2000点の雑誌が評価され、そのうち約10-12%のものが収録されるようです）。Web of Science（SCIExpanded）への収録誌の情報、Impact factorおよびジャーナル収録基準につきまして詳しいことがお知りになりたい方は下記のwebページをご覧ください。

◎ Web of Science (SCIExpanded) に収録されている雑誌について

<http://scientific.thomson.com/cgi-bin/jrnlst/jloptions.cgi?PC=D>

◎ インパクトファクター

<http://thomsonscientific.jp/products/jcr/support/faq/index.shtml>

◎ ジャーナル収録基準

<http://thomsonscientific.jp/resources/selection/criteria.shtml>

さて、Impact factorは引用活動に対して付与されるもの

ですから、実際にはまだ付与されておりません。最も早く2011年の6月中旬から7月頃に最初のImpact factorが付与される予定です。2011年夏に発表される「JGPPの2010年のImpact factor」の算出方法は以下のようになります。

「JGPPの2010年のImpact factor」=A÷B

A=2008年、2009年にJGPPに掲載された論文が2010年に引用された回数

B=2008年、2009年にJGPPが掲載した論文の数

以下同様に、Impact factorは年に一度ずつ更新されていきます。

さてここで、引用された回数を算出する論文の掲載されている雑誌ですが、これはWeb of Scienceに収録されていなければなりません。従いまして、例えばJGPPの2010年のImpact factorを高くするためには、2010年に発行される雑誌（Web of Scienceに収録されていることが必要）に論文を発表し、その中で2008年や2009年にJGPPに発表された論文（自分の論文か他の研究者の論文かは問いません）を引用文献として数多く引用することが求められます。残念ながら日本植物病理学会誌（JJP）は、Web of Scienceに収録されておりませんので、その中でJGPPの論文を引用してもカウントされないことになります。

但し、ここで注意点がございます。JGPPはWeb of Scienceに収録されたわけですから、2008年、2009年にJGPPで発表された論文を2010年発行のJGPPにどんどん引用すればImpact factorは簡単に上がることが予想されます。しかしながらImpact factor値を上げるために過剰な自誌引用が行われていないか、分野の状況から考えて高い自誌引用率が普通であるかどうかなどは、トムソン社での評価対象となり、悪質な場合はWeb of Scienceへの収録の取り消しの可能性もあります。若干多めの自誌引用を心がけていただければよろしいかと存じます。

以上のような事情ですので、皆様にはこれまでも増して、JGPPに多数の論文をご投稿いただき、2010年以降に発行される国際誌（JGPPを始めとして、Web of Science

に収録されている雑誌)にJGPPの論文を積極的に引用いただきますようお願い申し上げます。

日本植物病理学会長
露無慎二
日本植物病理学会誌編集委員長
奥野哲郎

【会員の動静】

1. 人 事

(1) 大学関係

中島雅己	H19. 4	茨城大学 農学部 植物生体 防御学研究室 准教授
成澤才彦	H19. 4	茨城大学 農学部 微生物生 態学研究室 准教授
眞山滋志	H20. 3	[退職] 神戸大学大学院 農 学研究科 植物病理学研究室 教授
長谷 修	H20. 4	山形大学 農学部 植物病理学 研究室 准教授
岩井孝尚	H20. 4	宮城大学食産業学部 植物生 理学研究室 准教授
望月知史	H20. 4	大阪府立大学 生命環境科学 研究科 植物遺伝子科学講座 助教
松田克礼	H20. 4	近畿大学 農学部 植物感染 制御工学研究室 教授
霜村典宏	H20. 4	鳥取大学 農学部附属菌類き のこ遺伝資源研究センター 准教授
五味剣二	H20. 4	香川大学 農学部 植物病理 学研究室 助教
松本 勲	H20. 6	愛媛大学 農学部 植物病学 研究室 教授

(2) 農水省関連独法関係

伊藤隆男	H19.10	果樹研 果樹病害研究チーム (安芸津) 主研 [果樹研 カン キツグリーンング病研究チー ム(口之津) 主研]
吉田重信	H20. 3	農林水産技術会議事務局 研 究調査官兼消費・安全局農産 安全管理課併任 [農林水産技 術会議事務局 研究調査官]

福本文良	H20. 3	退職 [中央農研 生物的病害 制御研究チーム長]
今田 準	H20. 3	退職 [果樹研 カンキツ調整 監]
西 和文	H20. 3	退職 [野茶研 野菜 IPM 研究 チーム上席]
堀内誠三	H20. 3	退職 [東北農研 研究支援セ ンター業務第1科長]
石黒 潔	H20. 4	中央農研 研究管理監 [農林 水産技術会議事務局筑波事務 所 研究交流管理官]
中野正明	H20. 4	果樹研(安芸津) 研究管理監 [果樹研 果樹病害研究チー ム上席]
御子柴義郎	H20. 4	農研機構本部 総合企画調整 部研究管理役 [畜草研 企画 管理部業務推進室室長]
松浦貴之	H20. 4	横浜植防 研究調査部病菌担 当第3チーム調査主任 [中央 農研 病害虫検出同定法研究 チーム主研]
花田 薫	H20. 4	中央農研 生物的病害制御研 究チーム長 [中央農研 企画 管理部業務推進室長]
田平 剛	H20. 4	中央農研 病害虫検出同定法 研究チーム主研 [神戸植防 業 務部病害虫同定診断担当]
伊藤陽子	H20. 4	農研機構本部 総合企画調整 部企画調整室主研 [花き研 生 育開花調節研究チーム主研]
岩波 徹	H20. 4	果樹研 カンキツグリーンン グ病研究チーム長 [果樹研 カンキツグリーンング病研究 チーム上席]
佐藤 衛	H20. 4	花き研 生育開花調節研究 チーム主研 [農研機構本部 情 報広報部産学官連携センター主 研]
松本直幸	H20. 4	北海道農研 企画管理部研究 調整役 [北海道農研 北海 道畑輪作研究チーム上席]
寺見文宏	H20. 4	野茶研 野菜 IPM 研究チーム 上席 [北海道農研 低温耐性 研究チーム上席]

兼松誠司	H20. 4	東北農研 大豆生理研究東北サブチーム長 [東北農研 寒冷地温暖化研究チーム上席(盛岡)]	白石俊昌	H20. 4	群馬県農業技術センター企画管理部 研究調整官
小泉信三	H20. 4	東北農研 寒冷地温暖化研究チーム上席(盛岡) [東北農研 東北水田輪作研究チーム長]	漆原寿彦	H20. 4	群馬県吾妻農業事務所普及指導課園芸指導係 主幹
中島敏彦	H20. 4	東北農研 病害抵抗性研究東北サブチーム長兼東北飼料イネ研究チーム [東北農研 東北飼料イネ研究チーム上席(大仙)]	中山利明	H20. 4	長野県農事試験場 原村試験地 試験地長
善林 薫	H20. 4	東北農研 病害抵抗性研究東北サブチーム主研(大仙) [東北農研 主研(特命:病害抵抗性研究チーム)]	市川 健	H20. 4	静岡県農林技術研究所 生産環境部 研究主幹
鬼頭英樹	H20. 4	東北農研 病害抵抗性研究東北サブチーム任期付研(大仙) [東北農研 任期付研(特命:病害抵抗性研究チーム)]	外側正之	H20. 4	静岡県農林技術研究所茶業研究センター病害虫研究室 主任研究員
野田孝人	H20. 4	国際農研 企画調整部広報室研究交流科長 [国際農研 企画調整部研究支援室連絡調整科長]	影山智津子	H20. 4	静岡県農林技術研究所果樹研究センター 研究主幹
飯田祐一郎	H20. 4	野茶研 野菜IPM研究チーム任期付研 採用	芳賀 一	H20. 4	静岡県農林技術研究所生産環境部 副主任
(3) 都道府県試験研究機関関係			鈴木幹彦	H20. 4	静岡県農林技術研究所生産環境部 主任研究員
美濃健一	H20. 4	北海道立中央農試 生産環境部子察科 科長	西島卓也	H20. 4	静岡県病害虫防除所 主任研究員
池田 信	H20. 4	網走農業改良普及センター	森川千春	H20. 4	石川県農業総合研究センター砂丘地農業試験場 専門研究員
小松 勉	H20. 4	北海道立上川農試技術普及部主査	富川 章	H20. 4	退職 [三重県] (三重県植物防疫協会 事務局長)
萩田孝志	H20. 4	北海道立北見農試生産研究部部長	黒田克利	H20. 4	三重県農業研究所 循環機能開発研究課 主幹研究員
白井佳代	H20. 4	北海道立北見農試 病虫科	鈴木啓史	H20. 4	三重県農業研究所 循環機能開発研究課 研究員
安岡真二	H20. 4	北海道立道南農試 研究部病虫科 科長	片岡光信	H20. 4	京都府農業資源研究センター 副所長
野津あゆみ	H20. 4	北海道立花・野菜技術センター 研究部病虫科	岡 久美子	H20. 4	大阪府環境農林水産総合研究所 任期付研究員
大橋真理子	H20. 4	茨城県板東地域農業改良普及センター	田平弘基	H20. 4	鳥取県中部総合事務所農林局 大山農業改良普及所 副主幹
林 宣夫	H20. 4	群馬県庁農政部 部長	大澤貴紀	H20. 4	鳥取県農林総合研究所園芸試験場 生物工学研究室 農林技師
剣持伊佐男	H20. 4	群馬県庁農政部技術支援課普	那須英夫	H20. 3	退職 [岡山県]
			伊達寛敬	H20. 4	岡山県農業総合センター農業試験場 場長
			密田和彦	H20. 4	愛媛県農林水産研究所 農業研究部病理昆虫室長
			小谷基文	H20. 4	愛媛県農林水産研究所 果樹

		研究センター病理昆虫室長	
崎山進二	H20. 4	愛媛県農林水産研究所 果樹研究センター病理昆虫室	
大西論平	H20. 4	愛媛県庁農林水産部 農産園芸課	
大政義久	H20. 4	愛媛県南予地方局 八幡浜支局産地育成室	
梶谷裕二	H20. 4	福岡県病害虫防除所 予察課長	
森山美穂	H20. 4	熊本県農業研究センター 生産環境研究所病害虫研究室	
挾間 涉	H20. 3	退職 [大分県] (住友化学株式会社アグロ事業部 技術顧問)	
有馬 忍	H20. 4	大分県農林水産部研究普及課 広域普及指導班 主幹	
森田鈴美	H20. 4	大分県北部振興局地域振興部 副主幹	
田村逸美	H20. 4	宮崎県東臼杵農林振興局 次長	

2. 学位取得者 (課程博士・論文博士)

Wedippuli Arachchige Chandanie	H19. 3	岐阜大学・連合農学研究科 博士 (農学) Study on Interactions between Arbuscular Mycorrhizal Fungi and Plant Growth Promoting Fungi
Joseph Mwafaida Mghalu	H19. 3	岐阜大学・連合農学研究科 博士 (農学) Lectins in <i>Rhizoctonia</i> spp. and <i>Sclerotium rolfsii</i> and their Related Biological Phenomena in the Soil
影山智津子	H19. 9	岐阜大学・連合農学研究科 博士 (農学) イネ培養細胞におけるエリシター応答発光のメカニズムに関する研究
塩谷 浩	H19. 9	岐阜大学・連合農学研究科 博士 (農学) カンキツかいよう病菌における細菌学的性質と非病原力/病原力遺伝子に関する研究
山内智史	H20. 3	東京農工大学・連合農学研究科 博士 (農学) レタス根腐病菌の多様性と DNA マーカーによる簡易レース判別法に関する研究

MD. Motaher Hossain	H20. 3	岐阜大学・連合農学研究科 博士 (農学) Physiological and Molecular Mechanisms of Plant Growth-Promoting Fungi (PGPF)-Induced Systemic Resistance in <i>Arabidopsis</i>
早川敏広	H20. 3	岐阜大学・連合農学研究科 博士 (農学) わが国に発生した芝草の新規病害に関する研究
今岡敦子	H20. 3	鳥取大学・連合農学研究科 博士 (農学) イネ科植物の光依存的抵抗性発現における光合成経路の役割に関する研究
Roxana Yanira Parada Jaco	H20. 3	鳥取大学・連合農学研究科 博士 (農学) A New Host-Specific Toxin, a Protein from Germinating Spores of <i>Alternaria brassicae</i> Causing Gray Leaf Spot of Brassica Plants
富濱 毅	H20. 3	鹿児島大学・連合農学研究科 博士 (農学) チャ赤焼病の病原細菌の諸性質, 生態ならびに防除法に関する研究
詹 蘇文	H20. 3	神戸大学大学院・農学研究科 博士 (農学) Identification of wheat genes for resistance to <i>Magnaporthe oryzae</i>
Nguyen Bao Quoc	H20. 3	神戸大学大学院・農学研究科 博士 (学術) Development of a novel RNA silencing system for functional genomics in the rice blast fungus, <i>Magnaporthe oryzae</i>

【関連学会情報】

第23回報農会シンポジウム『植物保護ハイビジョンー2008』のご案内ー遺伝子組換え作物の現状と課題ー

趣 旨：我が国における植物防疫の発展を推進するため、植物防疫の学術・技術の研究、交流および普及を図る一環として、このシンポジウムを開催する。

主 催：財団法人報農会

日 時：平成20年9月26日(金) 10:00-17:00

場 所：「北とぴあ」つつじホール(東京都北区王子1-11-1)

TEL 03-5390-1100 (会場への連絡は出来ません)

JR 京浜東北線・地下鉄南北線：王子駅下車、徒

歩 2 分（下図参照）

- 開 会：10:00-10:10 理事長挨拶 岩本 毅
 講 演：10:10-10:30 遺伝子組換え作物の行政の推進方向
 農林水産省農林水産技術会議事務局 横田敏恭
 10:40-11:25 遺伝子組換え作物の研究開発の現状
 独立行政法人農業生物資源研究所 田部井豊
 11:35-12:20 輸入港周辺で雑草化した遺伝子組換
 え作物が生物多様性に及ぼす影響
 独立行政法人農業環境技術研究所 松尾和人
 13:30-14:00 遺伝子組換えによる花の新開発につ
 いて
 サントリー株式会社 田中良和
 14:10-14:50 世界における遺伝子組換え作物によ
 る農業生産の現状と将来について
 日本モンサント株式会社 山根精一郎
 15:00-15:40 遺伝子組換え作物：世界の動向と今
 後の日本の展望
 宮城大学食産業学部 三石誠司
 15:55-16:45 総合討論

参加費：一般 5,000 円（当日参加 6,000 円）
 学生 1,000 円

申込み：参加希望者は 9 月 10 日（水）までに下記口座へ
 参加費をお振込み下さい。前もってテキストと名
 札をお送り致します。なお、11 日以降のお申込
 みも受け付けておりますので事務局までお問い合
 わせ下さい。

郵便振替 00100-5-103214

財団法人報農会

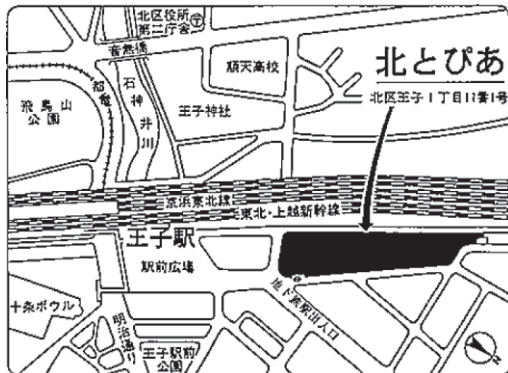
連絡先：財団法人報農会

事務局 塩澤宏康, 渡辺敦子

〒 187-0011 東京都小平市鈴木町 2-772

植物防疫資料館内

TEL/FAX 042-381-5455



功績者表彰式のお知らせ

シンポジウム終了後、会場を 16 階に移して、植物防疫
 の発展に寄与された功績者の表彰式及び祝賀会を開催いた
 します。シンポジウム参加者は、無料で出席ができます。
 お時間の許す方は、是非ご出席の上、祝福を賜りたくご案
 内申し上げます。

開催日時：平成 20 年 9 月 26 日（金）17:00-

開催場所：「北とびあ」16 階（天覧の間）

第 23 回功労賞受賞者（3 名：五十音順）

伊 阪 實 人（いさかまこと）

職 歴 福井県農事試験場，同県立短期大学，同県立
 大学

業 績 ○ラッキョウの腐敗の原因となる白色疫病に関
 する研究

○稲白葉枯病の予察方法に関する研究

○薬用植物オウレンの病害に関する研究

石 川 元 一（いしかわもといち）

職 歴 埼玉県農業試験場，同県園芸試験場

業 績 ○ニカメイチュウの実験的発生予察法の研究

○イネシンガレセンチュウによる黒点米の発生
 と防除法の確立

○畑作物におけるコガネムシ類の生態と防除法
 の確立

石 本 茂（いしもとしげる）

職 歴 高知県農業試験場，同県農業技術課，同県病害
 虫防除所

業 績 ○水稻作型（早，中，晩）の差異とニカメイチュ
 ウの化性変化に関する調査研究

○薬剤耐性害虫（ツマグロヨコバイ）に対する
 防除法の確立

○難防除害虫（ミナミキイロアザミウマ）に対
 する防除法の確立

【書評】

畑中顯和著「進化する“みどりの香り” —その神秘に
 迫る—」B6 版 190 頁，発行：2008 年 2 月 フレグランス
 ジャーナル社 1,470 円（税込み）ISBN 978-4-89479-129-9

本書は，‘みどりの香り’研究の第一人者である畑中顯
 和博士（山口大学名誉教授）の 50 年にわたる研究を，一
 般向けに親しみやすい言葉でまとめた良書である。一般向
 けといっても有機化学的・生理学的知見をしっかりと網羅
 しており，分野外の研究者が‘みどりの香り’に初めて触
 れる入門書としても優れていると言えよう。筆者の研究へ

の熱き思いが頁の端々に強く感じられる。

‘みどりの香り’とは分子量が100程度の炭素数6個のテルペノイドを指す。筆者をはじめとする日本の研究グループは、チャの葉より青葉アルコールを発見した。その発見から生合成経路の解明に至る研究の過程が、学会での発表の様子もふまえて詳しく書かれている。

本学会員にとって特に興味がある話題は、ピレトリンの生合成であろう。ピレトリンとは除虫菊に含まれる殺虫成分であり、蚊取り線香の成分としておなじみの、人畜には無害で昆虫の神経毒として作用する化合物である。筆者らは、花のみにあると信じられてきたピレトリンを葉に見だし、さらに害虫の食害により生じた‘みどりの香り’がSOSシグナルとなり、食害された植物のみならず、他の個体にもピレトリンの生合成を促すという事実を発見した。これは扉絵にカラーでも示されている。植物の防御システムの妙に感心させられる。

本書は



- 一章 みどりの香り
- 二章 みどりの香りはどのようなルートで発現するか
- 三章 森の香り-みどりの香りとテルペンの驚くべき協奏曲!
- 四章 みどりの香りとヒト
- 五章 みどりの香りの旅人

の五章で構成される。筆者は忙しい読者のために、最初に‘みどりの香り’をやさしく語るダイジェストで本書の内容を示している。ここで興味を持った内容の章をじっくり読んで良いと思われる。

大久保直美 (花き研究所)

下村 徹 著「もっと知りたい!微生物の力」

B6版 180頁 発行:2007年8月 技報堂出版 1890円(税込) ISBN:978-4-7655-4456-6

いうまでもなく、微生物は、動物、植物と並んで地球上の生物界の重要な構成要員だが、一般の人々にとっては文字どおり目に見えず、また、高校までの生物学の教科書でも乳酸菌や酵母などがごくさやかに扱われている程度だけなので、きわめてなじみが薄く、せいぜいバイ菌やカビ菌といった悪役のイメージしかない。また、一般市民の中にも動植物の愛好者は多いが、きのこなどを除いては、微生物の愛好者はほとんどいない。さらに、医学・薬学も含めて生物を扱うすべての研究者のうち、その約8割は動物関係であって、植物関係と微生物関係は残りの各1割ずつ

を占めるにすぎない。

しかし、微生物は動植物の病原菌であるとともに、地球生態系における分解者として必要欠くべからざる存在であり、一方、発酵食品などの製造の担い手でもある。こうした微生物の働きを一般の読者に啓蒙する試みはこれまでも数多くなされてきたが、残念ながら必ずしも十分に浸透しているとはいえない。ところがここに来て、地球環境や生態系の保全に関する一般の関心が従来にない高まりをみせてきており、生態系における微生物の重要性を広く世にアピールする絶好のチャンスが到来した。本書はまさにその狙いで刊行された誠に時宜を得た著書である。本書の構成は

- 第1章 善玉微生物と悪玉微生物
- 第2章 微生物とはどんな生き物なのか
- 第3章 自然界での微生物のはたらき
- 第4章 作物栽培における微生物の功罪
- 第5章 微生物の力で食べ物をつくる
- 第6章 ヒトに病気をひき起こす微生物
- 第7章 微生物は環境浄化の助っ人



となっており著者の長年の講義経験に基づいて、著者の専門である植物病原微生物も含めて、微生物全般に関する知識のエッセンスをバランスよくコンパクトに分かりやすく紹介している。

本書は、著者のあとがきにもあるとおり、「小さな生き物の大きな力」を「もっと知りたい」方々のための小著であり、一般の学生や市民向けの手軽な啓蒙書であるが、とかく専門の植物病原微生物だけに興味が偏りがちな植物病理学専攻の学生・院生諸君にも、広く微生物全般に関する知識を復習し、その中での環境微生物としての植物病原微生物の位置づけを再認識するための最適な副読本として推奨したい。 日比 忠明 (法政大学生命科学部教授)

【学会ニュース編集委員コーナー】

学会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内 学会ニュース編集委員会
FAX:03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏, 寺岡 徹, 築尾嘉章, 竹内妙子, 笹谷孝英
各委員宛

編集後記

学会ニュース第43号をお送りいたします。本号ではまずめでたいトップニュースがあります。学会の長い間の懸案事項であったIF(Impact factor)取得がようやく実現の運びとなったことであります。IF付与の前段階であるWeb of ScienceへのJGPPの収録が決まった訳ですが、IFを高くするためにはJGPPの引用が必須ですので、皆様のご協力を宜しくお願いいたします。次に、会員の異動です。今春も沢山の方々の異動がありました。退職された会員の方々、長い間お疲れ様でした。また、新しいポストに就かれた皆様、大いなるご活躍を期待しております。さらに学位を取得された方々、どうもおめでとうございます。

また、本号では書評が2部掲載されておりますが、興味深い著書2冊にご注目いただきたいと思います。これから、国際学会や談話会のシーズンを迎えますが、それらのレポートに限らず、この学会ニュースへの投稿を期待しております。

(加来久敏)
